

槐

かい

岡井省二創刊

平成23年4月号

平成二十三年四月一日発行 第二十一卷第四号 通巻第三三八号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



冬帽と針山

高橋将夫

冬帝の日本アルプス越えなりし
夢多く眠りの足りぬ浮寝鳥
浮寝鳥を起こさずに水流れゆく
印結ぶ仏の指も悴みぬ

悴む手握り合ふのも愛である
冬帽は父針山は母のもの
寒月光甘納豆に降りそそぐ
冬の虹裏は真白でありにけり
寒牡丹女の中の女なり
裸木にふれて知る吾が命かな
待春の大きく見ゆる指揮者の背

槐安集

水野恒彦

始めにロゴス開き切ったる佛手柑
遠き嶺の幽かな蒼き冬帽子
贖罪や風花すべて空に消ゆ
純粹と謂ふは痛かり樹氷林
白鯨と鈴木しづ子の行方かな

延広禎一

古老柿の白き粉吹く密寺かな
おらが春足踏ん張って日ノ出待つ
福笑ピカソかムンク小町かも
ひよつとこの面を外して鮫鱈鍋
カトレアの赤き魔性に触れゐたり



加藤みき

竹の葉を洗ふ一雨春隣
大寒やほのと明るき庭の内
信心は寡黙がよけれ寒椿
大空も大地もわれも寒明くる
猫柳いつも早足ばかりにて

石脇みはる

樽酒の木の香かんぼしき四温かな
小雪やピザ焼く匂ひしてゐたる
立春大吉オリーブオイルの一しづく
大寒や米櫃に米満たしをり
とある日の播州平野冴返る

中島陽華

一遍が吐けばひよいひよい雪兔
二の午のバナナを掲げてゐる少女
氷上の釣の手母へ懐へ
三日かなぼろりと鯛の鯛とれて
ビヤ樽の上の冬薔薇ポルカかな

竹内悦子

福笹の黄金くがねの俵にこにこと
一つ二つ三つ四つと寒の星
年酒汲み父の三十三回忌
冬蝶の地球はなれてゆきにけり
身すこし遠くなりたる木の芽和

栗栖惠通子

乃木坂に月の残りし大旦
雪しんしん卯の花炒つてをりにけり
玄海を乾としたり鷹柱
大寒の水晶宮に迷ひをり
寒月光夢の一兔も追へずゐる

大島翠木

どの樹にも棲む初晴の風なりき
初夢や溺れきる事言ふまじく
伊勢海老や悔無き色のありどころ
注連に雪はらはら高峰秀子の訃
雪女郎は母者よダムの雪しんしん

雨村敏子

きさらぎや流れて光る人の群れ
春の旅オットセイから観音へ
平らけき国にして罪々牡丹雪
鳥雲にひとり遊びの自在鍵
あたたかや愛宕の空に「乃」といふ字

小形さとる

鞍馬より雪の匂ひの体して
蕪はかぶ大根はだいのこゑ聞こゆ
大根細穴がだんだん増えてゆく
硼酸に綿を浸すや鳥雲に
大寒の麴に塩を混ぜてをる

本多俊子

つくづくと浪音もよき宝舟
長持のふたをあけたり初昔
眉を描く鏡のおくの風花す
蟬丸の墓に近づき音冴ゆる
微笑みは返すものです大嚏

久津見風牛

先頭の代れど雪に迷ふかな
雪吊りの身構へ解くや日の射して
初湯して茹で蛸鏡に写しをり
ふらふらときて雪虫に掴まれり
翁にもかなふ冬帽編まれをり

近藤 きくえ

合掌にはじまる朝お元日
ひと言の添書賀状ちから満つ
比叡照り茶屋はしぐれとなりにけり
冬薔薇の香りとこゑを聞かんとす
下萌や川面にうつる飛行船

近藤 喜子

若菜野にひちりき吹けよ草の精
凍滝や流れねば時うしなひぬ
風花の空あり眼あげるべし
日を恋ふて日の姿なり藪柑子
有為の奥山うろろうと雪女郎

谷村 幸子

とんど火に高々あがる声と文字
葛城の峰に淡雪初詣
紀の国に念珠くりをり寒薔薇
ご神木は一位檜なり仰ぎみる
一月の真竹とりわけ艶めきて

瀬川 公馨

年明けの石橋わたる古^マ代^{スト}象^{ドン}
けあらしや大恐慌の触れ太鼓
ひやひやと蝦蟇の目あまた大唐津
山越えやシフォンケーキと囀と
セーヌ河岸に色を差したる春霞

久保東海司

小さき福賜へと小さき福笹を
夫婦滝ひとつに凍てて光りをる
書初の硯に貰う神の水
推敲のひとつときとなるふところ手
白息の往き交ふ魯寺普請

松原仲子

月冴ゆる夜くちびるの開く音
雪女郎金太郎飴なめてをる
天の声ふきぬけてゆく雪の上
尖りゐる冬日を揺らす鏡かな
しろがねの冬日に酔ひてをりにけり



槐市集

近藤 公子

煮凝を突くやどうにもならぬこと
花八ツ手今川焼を一ツ半
相照らし輝きを増す龍の玉
待春や山頭火とも違ふ道
春めくや鎖骨にながすリンパ液

近藤 紀子

浪の花能登島山の朝日影
娘の声のとながつてをる十二月
赤子抱くやうに大根持ちて来し
折り目美し布巾を使ふお元日
雪見障子開けて雪見し母の家

柴田 靖子

冬の波風と対話してるかに
故郷の空広がりにて都鳥
藪入りの声遠くなり里の空
ローソクの焰にやすらぎ寒夜かな
鳥帰る庭の日溜り広がりにて

庄司 久美子

日のあたる金色の千木初鴉
節くれの樹医の両手や冬櫻
湯ざめすや寿限無寿限無の仮の宿
盤の飛車右に左に寒紅梅
寒暁やバイク赤々遠ざかる



槐集

高橋将夫選

腹ぺこの猥に引かれて新年へ
守口 柳川 晋

重詰の隙を言霊にて充たす
弛むまで納豆を掻きまぜてゐる

大切なことは伏せ字に千葉笑
天地の具を莊嚴しおじやかな

初曆人の匂ひを持ちはじむ
枚方 熊川 暁子

七草やほつほつと身に満つるもの
困や震へるものと吠るもの

月蒼くして氷瀑の炎かな
着ぶくれて自適の雲にのりにけり
太白の月と並びし寒の入
守口 岩下 芳子

仙人の臥所としたる松の雪
初天神上へ上へと絵馬を掛け

冬芽すでに年輪深く刻みたる
ゆるやかに初湯へ煙のぼりたる

筆硯の恍惚として在る大旦
東京 西村 純太

光陰の渦の中なる夢はじめ
海鼠噛むひと筆達磨の眇かな

我が光^ッに触れてゆきたる冬の月
冬霧の攫ふものなき火宅かな

亀の池パズルの如く氷浮き
一湾に流水声を上げにけり
祝の酒吐息となりし三日かな
喜屋川 前田美恵子

初曆未だ机の上にある
月面の一步危うき初寝覚

洗はれて水平線の初日の出
御降りのあとに生れし星の空
枚方 中野 京子

日輪の照らし続ける去年今年
どこまでも青き空なり大根引き

わらわらと光の波の春隣

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

天地の具を荘厳しおじやかな 柳川 晋

「天地の具を荘厳（しようこん）し」という誠に荘嚴な措辞の後に何が来るかと思えば「雑炊」でこれには意表をつかれた。しかし、雑炊には具として野菜や魚介類を入れるわけで、粥は胃腸にもやさしいから、考えてみると「天地の具を荘嚴（しようこん）し」の措辞はもの、ことの本質を言い当てているのかもしれない。

〈腹へこの糺に引かれて新年へ〉の句では、きつと糺が悪夢を食べてくれるだろう。〈重詰の隙を言霊にて充たす〉の句だが、縁起のよい食べ物が詰まっている隙間を言霊がみたくとは誠にめでたい。〈大切なことは伏せ字に千葉笑〉の千葉笑は、千葉寺（千葉市）の大晦日の行事で、顔を隠し悪い人などを笑う。

初曆人の句ひを持ちはじむ 熊川 暁子

初曆は年が明けてその年の曆を使い始めることで、曆そのものもいう。まささらな曆にスケジュールの書き込みが入ったりして、人の手が加わってゆく。人の生活の中で曆やスケジュール表の果たす役割は大きいが、「人の句ひを持ちはじむ」の措辞が生活感をみごとに表現している。「曆が人の句ひを持つ」という視点はまさに作者ならではのもの。

他に〈七草やほつほつと身に満つるもの〉〈着ぶくれて自適の雲にのりにけり〉があるが、これらの句からは作者の心のゆとりがほのぼのと伝わってくる。一転して、〈月蒼くして氷瀑の炎かな〉からは緊張感がよく伝わってくる。また、〈風や震

へるものと吠るもの〉における「震へるもの」と「吠るもの」の対比も面白い。

仙人の臥所としたる松の雪 岩下 芳子

松の枝に積もった雪が仙人の臥所だという。枝の上に綿のように積もった雪は確かに臥所と見てもおかしくない。しかも仙人の臥所とは言い得て妙。ところで、枝の雪は突然バサリと落ちるのでご用心。

光陰の渦の中なる夢はじめ 西村 純太

悠久の時空の渦の中とはまた希有壮大な初夢である。エネルギーと暗黒エネルギーに満ちた宇宙であって、無常の世界とは解したくない。

亀の池パズルの如く水浮き 前田美恵子

池に氷がばらばらに浮いている簡明な景。浮き水をパズルと見た句は他になかろう。場所が亀の池というのも、親しみがあつていい。

洗はれて水平線の初日の出 中野 京子

波の彼方の水平線に初日がのぼる景が鮮やかに描かれている。〈御降りのあとに生まれし星の空〉も好感のもてる一句。

寒空や一片の雲千代結び 中田 禎子

雲の形はいろいろな詠まれる。この句では寒々とした冬の雲が千代結びであるところが、なんともかわいい。（以下略）